

図書室月報

2022年(令和4年)11月5日

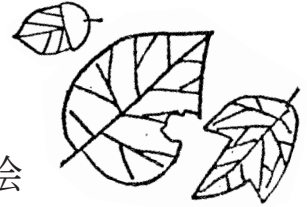
第714号

ブッククラブから



宇佐見りん著 『かか』を読んで

庄司 沙絵



逃げ場のない「痛み」を感じる作品である。その「痛み」とは、主人公うーちゃんが女であるためにつきまとう身体の「痛み」であり、うーちゃんの母親Ⅱかかへの愛憎入り混じる感情の「痛み」であり、また、精神を病み、アルコール依存症で自傷行為を繰り返すかかの心と身体「痛み」である。本作は、かかの「痛み」にほぼ完全に同一化するが故に苦悩するうーちゃんの世界を描いている。

うーちゃんとその家族を取り巻く状況を、昨今の社会課題に照らし合わせて、「ヤングケアラー」「機能不全家族の世代間連鎖」「毒親」「共依存」などと称することはできるだろう。しかしながら、この物語はそのようなカテゴリーに与えられるのを拒んでいるかのようで、客観的な言葉で評したり断じた世界を見よ、と首根っこを掴まれて、目を見開いていないといけないような心持ちにさせられるのである。読者も苦しい。このような感覚になるのは、物語が独特な語りで進んでいくからだ。うーちゃんの視点に近い語り手は、うーちゃんの弟のみつくんに「おまい」と二人称で呼びかけながら、「かか弁」という家庭内の親密な言語を用いて語りかけるのである。

読書会当日、ある参加者が、「おまい」というのは自分に語りかけられているようで、巻き込まれて読まざるを得ない、と感想を述べた。講師の内藤千珠子先生も、作者はその親密さを狙っている、とおっしゃり、この苦しい読書の理由が一つ解き明かされた心地がした。近代以降に書かれた小説で、こんなにも効果的に二人称（「おまえ」「あなた」「君」）を使いこなした作品があるだろうか。これを18歳で書いたという作者の筆力に感嘆するしかない。

同時に、なぜ弟のみつくんを語りかける相手に選んだのだろうか、と疑問が湧いた。私が想像した意図は一つ。第一に、うーちゃんと同じ母の腹から産まれ、同じ言語（かか弁）を

理解し、同じ機能不全家族で育った人物であるから。

第二に、境遇を共有していてもなお、男性であるために、うーちゃんやかかの女としての「痛み」を分かり合えない存在として、永遠に呼びかけられる対象であるから。うーちゃんが父親Ⅱととから女性を睨めるような目で見られ嫌悪を感じる場面で、みつくんは「おまいにはわかりますか」「おまいにもわからんでしょう」と突き放されているのである。

内藤先生は、強制的異性愛制度や家父長制とそれに伴う性差別の問題が、「女性身体」を持つうーちゃんの苦悩に内包されていると指摘された。一方で、「男らしさ」をまとうてきた男性たちの傷の見えにくさが浮かび上がってくる、という点にも触れられた。

さて、物語の終盤、うーちゃんが自らの苦しみを解決すべく向かった先は熊野であった。目的は、かかを想念の中で殺し、自分でかかを産み直して、一度と子ども（うーちゃん）を産まないように育てるためである。子宮摘出手術を控えたかかを残しての一人旅であった。

熊野詣の途中、うーちゃんはそれまで拠り所にしてきたSNSのコミュニティに向かって母は手術が失敗して死んだと嘘をつき、アカウントを削除する。直後、本当にかかの死を予感し、嘘のばちが当たったのだと思ひ込む。かかを殺した自らの穢れを一身に背負い、雷雨の中「かかあ」と泣き叫びながら熊野の山を巡るうーちゃん。感情の揺れとそれに呼応するかなような自然の描写に胸が締め付けられる。

手術は成功し、かかは生きていた。熊野の山を通過した先に、うーちゃんに希望はあったのだろうか。彼女の将来を想像するに、清々しい読後感とはいかない。しかし、安易に明るい結末にしない作者のスタンスからは、文学への誠実さが伝わってきて、そこに微かだが確かな光を見出せた気がした。

(河出文庫)

〈図書室のつどい参加者の感想〉

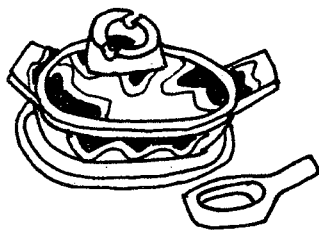
ふみくん著

「既存の恋愛観に振り回されないプロヒモ幸福論」に参加して

『超プロヒモ理論 浮いた家賃は1000万、

寄生生活13年の逃げきり幸福論』

木村 千鶴



女性の家に転がり込んで、働きもせず養ってもらいながら、毎日好きなことをして暮らす。世間では、そんな男性を「ヒモ」と呼ぶ。早稲田大学在学中から14年間、合計7人の女性に「寄生」してきたふみくんは、プロのヒモを名乗っている。これまで女性に払わせた家賃は1000万円を超え、日々の食費や、服などの日用品から趣味のゲーム機などの娯楽品に至るまで、経済的に女性に頼りきって生きてきたという。そんなふみくんと初めて会ったのは去年の夏。会社の後輩に、「プロのヒモをやっている友人がいるので、一緒に飲みましょう」と誘われたのがきっかけだ。女性をとつかえひつかえし、ひと財産の金額の家賃を払わせた男性とは、いったいどんなチャライ人だろう。そんな恐怖心を抱えながら新宿三丁目の焼き鳥店に到着してふみくんと初対面したとき、あまりの腰の低さに私は拍子抜けしてしまった。常に周りに気を配り、グラスが空いたらすかさずメニューを差し出す。「僕はあまりお腹がすいていないから、みなさんの好きなものを頼んでください」と謙虚に料理の注文を促す彼は、「ヒモ」という言葉からイメージされる凶々しさとはほど遠く、どこまでも利他的だった。

聞けば、ふみくんの尽くす姿勢は彼女との同棲生活で

も貰かれていた。朝・晩の食事に加えて、彼女がお昼に会社で食べるお弁当も作り、掃除・洗濯といった一通りの家事、駅までのお見送りとお迎え、仕事の愚痴を聞くこともこなす。彼女が「野菜を食べたい」と一言言えば、その真意を考察して食べたいメニューをピタリと当てる。サラダを食べたいのならサラダと言うはずだ、けれど具体的メニューをリクエストしないのは、「何かちゃんと食べたいけどカロリーは抑えたい」という意味なのだ、と。そうして、野菜をたっぷりとれて満足感もある「ポトフ」や、炭水化物を控えることができる「おでん」を作るのである。

そんなふみくんは、家事や彼女のサポートをまったく億劫がることなく、むしろ楽しんでる。「自分の苦手なこと(会社勤め)からは堂々と逃げ、得意なことだけやって人生を楽しむ」を体現しているのだ。ふみくんのような生き方を真似できれば幸せな人生が送れそうなのだが、多くの人が踏みとどまるのは、世間の「べき論」に押しつぶされてしまうからだろう。男ならバリバリ働いて家族を養うべきだ、女の幸せは結婚して子どもを産むことにこそある……そんな価値観は、多様性がさげばれる今の時代にも世の中に根深くはびこっている。「男

の子なんだから泣いちゃダメ」「女の子だから料理くらいできなきゃね」子時代から大人たちに悪気なくそう言われてきた経験や、漫画や小説、ドラマなど各種メディアに幼少期から押し付けられてきたジェンダー観は、そう簡単に変わるものではない。
だからこそ、ふみくんの生き方を見た人は心を揺さぶられるのだ。人間関係、恋愛、仕事で悩み、生きづらさを感じる人は、ふみくんの著書『超プロヒモ理論』を読んでみてほしい。自分にとっての本当の幸せが見つかるかもしれない。(二見書房)

くにたちブッククラブ

—感傷から遠く離れて—

奥泉光『東京自叙伝』

(集英社文庫)

講師 佐藤 泉
(青山学院大学・日本近代文学)
と き 11月10日(木)
夜7時半~9時半
ところ 公民館 地下ホール
申込先 公民館 ☎(572)5141

*次回は12月8日(木)
福永武彦『草の花』
(新潮文庫)です。



新着図書から

<p>〔総記〕 図書館魔女の蔵書票 (エクス・リブリス) 大島真理 (郵研社) 019</p>		<p>障害者ってだれのこと? 荒井裕樹 (平凡社) 369 障がい者が主役の喫茶(カフェ)を地域にひらく 障がいをもつ市民の生涯学習研究会編 (ゆじょんと) 犠牲者意識ナシヨナリズム林志弦 (東洋経済新報社) もしもに役立つ、いつものモノ選び 松永りえ (エム・ディエヌコーポレーション) 369 369</p>	
<p>〔歴史〕 事典太平洋戦争と子どもたち 浅井春夫編 (吉川弘文館) 210 東京の古墳を探る 松崎元樹 (吉川弘文館) 213 復帰五〇年の記憶 安里英子 (藤原書店) 219 ウクライナ現代史 アレクサンドラ・グージョン (河出書房新社) 238 中学生から知りたいウクライナのこと 小山哲 (ミシマ社) 238</p>		<p>世界珍食紀行 山田七絵編 (文藝春秋) 383 歴史の中の多様な「性」 三橋順子 (岩波書店) 384 女性兵士という難問 佐藤文香 (慶應義塾大学出版会) 392 世界の基地問題と沖縄 川名晋史編 (明石書店) 395 〔自然科学〕 なぜ、その地形は生まれたのか? 松本穂高 (日本実業出版社) 454 あした出会えるきのこ100新井文彦 (山と溪谷社) 474</p>	
<p>〔社会科学〕 ウルグアイを知るための60章 山口恵美子編著 (明石書店) 302 歴史の予兆を読む 池上彰 (朝日新聞出版) 304 そもそも民主主義ってなんですか? 宇野重規 (東京新聞) 311 民主主義のルールと精神 ヤンllヴェルナー・ミュラー (みすず書房) 311 記号化される先住民/女性/子ども 石原真衣編著 (青土社) 316 数奇な航海 川井龍介 (旬報社) 316 アンネ・フランクはひとりじゃなかった リアン・フェルーフエン (みすず書房) 316 ロシアとシリア 青山弘之 (岩波書店) 319 無国籍と複数国籍 陳天璽 (光文社) 329 脱成長と欲望の資本主義 丸山俊一 (東洋経済新報社) 332 ほんとうの多様性についての話をしよう サンドラ・ヘフェリン (旬報社) 361 (サラリーマン)のメディア史 谷原史 (慶應義塾大学出版会) 361 おっさん社会が生きづらい 小島慶子 (PHP研究所) 367</p>		<p>〔工業〕 ごみ清掃のお仕事 押田五郎 (解放出版社) 518 原発再稼働 日野行介 (集英社) 543 信州のおばあちゃんたちに聞いた100年後にも残したいふるさとレシビ100 大和書房編集部編 (大和書房) 596 〔産業〕 フィンランド虚像の森 アンツシ・ヨキランタ (新泉社) 652 〔芸術〕 萩尾望都がいる 長山靖生 (光文社) 726 〔文学〕 ワンダーランドに卒業はない 中島京子 (世界思想社) 909 文豪の家 高橋敏夫・監修 (エクスナレッジ) 910 サウンド・ポスト 岩城けい (筑摩書房) 911 その本は 又吉直樹 (ポプラ社) 915 ただいまを生きる水上勉 (アーツアンドクラフツ) 916 信仰 村田沙耶香 (文藝春秋) 916 大丈夫な人 カンファギル (白水社) 924 さすらう地 キムスム (新泉社) 925</p>	

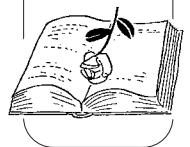
〈一節〉

大谷悠著

都市の〈隙間〉から

まちをしくくろく

アパートの空き部屋で始まった活動



今でこそ2つの工房とひとつの幼稚園を経営し、ライブツイヒを代表する住民の活動となった「本の子ども」ですが、もともとはアパートの一室で始まりました。当時、放課後に子どもたちが集う場所をつくりたいと考えていたベルギットさんとその仲間2人は、2001年に南地域のアパートの空き部屋を見つけます。ライブツイヒの住宅公社が所有していた物件で借り手がつかず、「本の子ども」が使いたいと申し出たところ格安の家賃で貸しだしてくれたといいます。まずは自分たちの子どもたち、その友だちを招いて絵本をつくる会を始めます。それが口コミで伝わり、徐々に多くの子どもたちが訪れるようになりました。

活動が大きくなると最初の部屋では手狭になり、より大きくかつ家賃の安い活動場所が必要になりました。そこで目に止まったのが2005年当時始まったばかりの、ハウスハルテンの「家守の家」でした。リンデナウ地区の中心部であるデメリング通りの建物の一階部分を、5年間限定で利用しはじめます。広さは165㎡で、子どもたちが制作を行う作業スペース、版画の工房スペース、事務所兼倉庫、トイレを備えていましたが、家賃は無し。ベルギットさんは、「当時、都市の縮小に直面していたライブツイヒには今よりもさらに多くの空き家があり、初期の活動場所は簡単に見つけることができ、活動もすぐに軌道に乗りました」と振り返ります。彼女らの夢は、当時のライブツイヒが人口減少と空き家問題に直面していたからこそ実現したといえるでしょう。

(学芸出版社)

図書室のしらす

夢を読み解く心理学

お話 松田英子(東洋大学)

みなさんは昨夜どんな夢を見ましたか? 荒唐無稽で面白い夢、「夢でよかつた」とほっとしながら目覚める恐い夢、「夢だったのか」とつぶやいてしまうような幸せな夢。時には素晴らしいアイデアの源泉となり得る夢、稀に「あつこれは夢だ!」と夢の中で気づく夢。

1日の1/3を睡眠にあてる人なら人生の1/12は夢を見ていると言われます。そもそも「夢をみる」という現象は何なのでしょう。思いもよらぬ人や物が出てくることもある夢は、ある意味自分から自分へのメッセージとも言える。と心理学が専門の松田さんはおっしゃいます。人の脳と睡眠の仕組みから夢のメカニズムを知り、自分の記憶の中の手がかりをうまく使って、心の奥深くに潜む考えや希望、悩みを見つけて、今よりも少し睡眠を楽しみ、健康で幸せに生きる心理学的ヒントを見つけてみませんか。

〈松田さんの本〉 表題作(デイスカバー・トゥエンティワン)、『はじめの明晰夢』(朝日出版社) ほか

とき 12月22日(木)
夜7時~9時
ところ 公民館 地下ホール
定員 50名(申込先着順)
申込 11月22日(火)朝9時
公民館 ☎(572)5141



〈私の本棚から 第2回〉

赤瀬川原平著

『我輩は
施主である』



吉沢いより

どことなく夏目漱石の有名な小説のタイトルと似ていると思いませんか。この小説を読もうと思っただけは印象的なタイトルでした。書き出しも、夏目漱石の『吾輩は猫である』に似せているのでしょうか。

読み比べることが好きな方は、二つの作品を読み比べてみてはいかがでしょう。

この小説は、読みはじめてからすぐに飽きてしまう人にもおすすめです。なぜなら、一つの区切りが10ページほどなのであつという間に読み終わってしまします。そして、各章のタイトルがユニークなので内容が気になつてもう一章、もう一章と読み進めることができます。一日一章読み進めれば、一か月で読み切ることが出来ます。

読書の秋に挑戦出来なかつた方も、是非読書を始めてみませんか。

家を建てる時に必要な道具が多く登場します。どれも普段見かけないものばかりなので少し読みづらいつ感じられるかもしれません。たとえば、「鑿」を読めるでしょうか。この漢

字は「たがね」と読みます。私は読み方がわからなかつたので調べました。主に岩石や金属を加工するための工具です。鋭い刃を持っており、反対側をハンマーで叩くことでコンクリートを削ったり、鉄板を加工したりします。ほかにも、鉋(かんな)や鉋(なた)や鑿(のみ)などが登場します。ひらがなであればわかる道具も漢字の表記だと読めない方もいらつしやるのではないのでしょうか。私は、わからなくなるたびに調べながら読みました。調べながら本を読むのは疲れてしまうと思うので、休みながら読むのもおすすめです。

いつか、この小説の主人公のように自分の好きを詰め込んだ家を建てられたらと思います。(中公文庫)

係から



徐々に秋も深まり、紅葉が楽しめる季節になりました。お出かけの合間や秋の夜長にゆつくりと本を読んでみるのはいかがでしょうか?

蔵書点検にともなう
臨時休館のお知らせ

中央図書館、北市民プラザ図書館は蔵書点検のため、臨時休館いたします。

11/7(月)~11(金)

公民館図書室および各分室は開室日通りです。